

国際交流委員会企画シンポジウム

多文化共生社会における保育の課題と展望

—過去3回のシンポジウムの成果を踏まえて—

企画者：国際交流委員会
司会者：山本登志哉（共愛学園前橋国際大学）
話題提供者：名倉啓太郎（仁愛大学）
谷口 正子（大阪国際大学）
箕浦 康子（お茶の水女子大学）
指定討論者：星三和子（東京家政学院筑波女子大学）
鳥光美緒子（広島大学）

〔企画の趣旨〕

本学会国際交流委員会は、「足元からの国際交流をみつめよう」という意図のもと、過去3回の研究大会において『日本における地域の中の多文化保育』をテーマにシンポジウムを企画してきた。第54回大会では群馬県大泉町の実践を、第55回大会では大阪府八尾市、そして第56回大会では静岡県浜松市の実践を、それぞれ保育現場の担当者、行政の担当者、及び研究者の三者が一堂に会して、異なる切り口から現状を紹介してきた。三地域は、外国籍住人の人数もその人口比、そして滞在理由や滞在期間も異なり、その結果、多文化保育の展開も地域の特性に根ざして個性的に展開しており、わが国の多文化保育の多様性を理解する上で重要な資料源を提供してきたといえる。しかし、同時に、多文化保育の質を向上させていくためには、保育現場においても、行政担当者や研究者であっても幾つもの課題が残され、今後の検討が求められることとなった。例えば、第54回大会では、一時滞在型の外国集住地域における多文化保育をめぐる、以下のような課題が指摘されてきた（中澤，2001）。

- (1) 保護者と保育者との双方向コミュニケーションをどのように保証するか
- (2) 保護者と保育者との保育期待のズレをどのように解消するか
- (3) 保育所と外国人経営託児所との連携、及び小学校との連携をどのようにすすめるか
- (4) 母国語教育の重要性

また、第55回大会では、永住滞在型の地域における異文化保育の展開に関しては、以下のような課題が指摘された（名倉，2002）。

- (1) 民族のもつ文化へのアイデンティティが異文化のなかでどのように形成されるのか
- (2) 相互に異なる生活の様式やものの考え方、価値観などの文化を、生活するなかで、相互に理解し、学び会う関係を、子どものみならず、地域の大人も、保護者もどのようにもてるか、またそれを実現するための条件とは？
- (3) 多文化交流の保育現場において、相互の言語学習をどのようにすすめるか
- (4) 保育者・保護者、保護者同士の信頼関係を築く保護者参画型の多文化交流活動の創出

これまで3回のシンポジウムで報告してきた多文化保育の実践は、多文化共生を実現している先駆的な地域社会の取り組みであり、こうした地域社会はわが国にあっては、まだ点在している状況である。しかし、日本で暮らす外国人の増加と定住化、あるいは幼い子どもをもつ家族の国を越えた移動は今後も続き、多文化保育の必要は更に多くの地域に浸透し具体的な対応が迫られることが予想される。今回のシンポジウムは、やがて到来するであろう多文化共生社会を生きる子どもたちの教育と保育の確立に向けて、これまで報告し話し合ってきた三地域の多文化保育の実践報告から見えてきた事柄を整理し、課題として指摘されてきたことを更に掘り下げて、多文化保育の基本を確認し可能性を広げることを目的としている。

[話題提供者のプロフィール]

- *名倉啓太郎：日本保育学会国際交流委員会委員長として、過去3回のシンポジウムを企画し、その報告をまとめてこられた。多文化保育の展開には、保育現場における創意工夫はもとより、行政のサポートが強く求められている。これまで報告のあった三地域の実践例から、子どものもつ文化的な背景の違いを生かす保育の展開上の工夫や互いの違いを踏まえた仲間作りのヒント、あるいは多文化保育を支える行政の取り組みで参考にすべき事柄を指摘いただき、多文化保育の多様な開発と質の向上に向けた実践と研究の方向性を示唆していただく。
- *谷口 正子：研究費の助成をうけて「多文化子育て調査」を実施し、報告書をまとめられた。これらの調査をもとに、多文化保育の課題の一つとして指摘されている、保育者と保護者の双方向的コミュニケーションの現状とこれをすすめていくための配慮点、あるいは改善点を具体的に示していただく。主な著書に、『幼児のための多文化理解教育』（明石書店・翻訳）、『多文化共生保育Q & A』（大阪保育子育て人権情報センター）などがある。
- *箕浦 康子：社会・文化の文脈のなかでの人間形成や、そこで生起しているさまざまな臨床上の問題、文化移動にともなう諸問題を、主に面接やフィールドワークの手法を使って研究しておられる。社会学や文化人類学のマクロなアプローチと心理学のマクロなアプローチの連携させた社会臨床論の立場から人間形成の比較文化的研究をすすめている。文化間移動や社会変動などにより流動化する生活世界と個人の関係性、あるいはグローバル化の進展が人間生活に及ぼす影響についての研究を踏まえ、多文化共生社会の教育展開上の基本を語っていただく。主な著書に、『子どもの異文化体験—人間形成過程の心理人類学的研究』（思索社、1984）、『文化のなかの子ども』（東京大学出版会、1990）、『地球市民を育てる教育』（岩波出版、1997）などがある。
- *国際交流委員会委員は、大戸美也子・泉 千勢・田中享胤・鳥光美緒子・日浦直美・星三和子・山本登志哉の7名で構成しており、司会と指定討論者は委員が担当した。